

巻頭言

現代日本における伝道の神学

—第12回日本福音主義神学会全国研究会議を振り返って—

編集長 市川康則

ここに学会誌『福音主義神学』(40)をお届けする。今号は、2008年11月25～28日、神戸YMCAにて開催された第12回日本福音主義神学会全国研究会議¹における4つの講演とそれへの応答を掲載した。さらに、研究会議では時間の制約上できなかつた、応答への(講師による)「再応答」の文書をも、今号に加えた。それにより、所与のテーマを巡って、よりきめ細かな議論ができるようにと願った次第である。

伝道は神の国の終末的進展に仕える教会の自己形成そのもの、教会の根本的存在理由であるという認識から、伝道についての多角的考察を企図し、「現代日本における伝道の神学」の全体主題の下に、伝道の「使信」「脈絡」「担い手」「結実—教会建設—」の4つの個別主題を巡って講演と応答を試みた。

伝道使信は「イエス・キリスト」(ナザレのイエスだけが救い主)に集約されるが、しかし、キリストへの信仰による救いとは具体的に何か、何をもたらさすか。罪と悲慘の多様な現われと相俟って、救いの結果も多様で豊かである

¹2008年の全国研究会議は、第13回研究会議として案内され開催されたが、その後、実際には第12回の会議であることが判明したので、ここでは正しい数字で記した。この点については『J・E・T・S NEWS』第32号(2009年9月1日)3頁を参照。なお、全国研究会議の総括的報告記事については、筆者の「第13回福音主義神学会全国研究会議を振り返って—総括者の耳に聞こえてきたこと—」(『クリスチャン新聞』2009年2月15日、5頁)を参照されたい。

はずである。そのために、その使信は応用され、発展させられる必要がある。キリストの福音は現代日本社会の必要や課題のために何を求め、また、もたらし得るのか。キリストは唯一の救い主にして、天地の主権者である（マタイ 28：18）。したがって、伝道も全被造物、全世界、人生の全領域をその対象・射程としている（マルコ 16：15 参）。

伝道使信の明確化・具体化のためには、その文脈を的確に認識することが不可欠である。現代社会の顕著な特徴の一つは多元主義である。多元主義は西欧社会において規範への服従を要求する権威主義への反動として起こり、すべてを相対化する一つの立場ないし世界観として作用している。かかる多元主義は福音の立場から原理的には歓迎し得ない。すべてが多元主義的に捉えられるとき、社会全体に関わる事柄の公共性（この意味での普遍性）が成り立たなくなると、しかし他方、同一集団帰属意識が働き、個や多様性が圧殺されやすい伝統的日本社会においては、多元主義は権威主義・画一主義に抗するものとして機能することも否めない。それは伝道の前進に多少なりとも益し得る。多元主義の功罪は、伝道の実践にとって不可避的な考察課題となる。

伝道は根本的に三位一体の神の御業であるが、神はご自身の御国の進展と成就に向けて、福音宣教においてご自身の僕たちを用いたもう。伝道の第一義的な担い手は、使徒たちの伝道によって生まれた教会自身である。教会は個々の信徒により形成されるがゆえに、すべての信徒は基本的に伝道の担い手である。しかし、教会には最初期から使徒・伝道者・預言者のような特別の奉仕者の他に、恒常的な働き人として長老（監督）や執事がいた。教会役員である御言葉の教師の伝道と、信徒が自発的に行う伝道とはどのように違うのか。すべての奉仕は主からの召しに基づき、御霊の賜物を要するが、技手・任職は伝道にとって“本質的な”事柄なのか。さらに、特定の対象に対して、また特定の領域において伝道する諸団体もあり、有益な働きをしている。教会の伝道と他団体の伝道との関係はどのようなのが望ましいか。これらも重要な検討課題である。

伝道は当然、キリストを信じる人々を救いへと至らせる。そして、信者たちは最初期から信仰共同体を形成してきた。旧約時代には常に神の「民」が育成され、新約時代にも伝道の過程で教会が形成された。特に日本のような反キリ

スト教的社会では、個々人の救済やその数的増加に留まらず、教会が制度的に形成され、社会的ファクターとなることを通してこそ、神の国が形を取って社会に進展していく。教会は決して神の国と同義的ではないが、その顕現の中心的な形態、最も具体的なしるしである。その意味で教会建設は伝道の不可欠の実りであり、さらにその進展の器となる。

如上の問題・課題が、掲載された論文と応答と再応答の議論によって多面的に論考されている。本誌が日本における福音宣教と教会建設にとつて、そして、そのための神学研鑽にとつて、たとえ幾らかでも有益であり、用いられることを、また、今後の伝道論的神学研究のための一つの糸口となることを、収獲の主に祈り願う次第である。

加えて、プロテスタント宣教 150 年を記念するこの年、日本のプロテスタントの歴史に関する論文を二つ掲載できたことに感謝する。山口陽一氏による「キリシタン禁令とプロテスタント 100 年——ベツテルハイムから敗戦まで」と上中栄氏による『「信教の自由」と日本の社会——居場所探しの奮闘史』である。いずれも、東部部会における春の研究会で発表されたものを土台に書き下ろしていただいた。